

第111回 三方限古典塾（'16, 1, 21）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3 - 28）

1 歩を進むるの処に、便ち歩を退くるを思わば、庶んど藩に触るるの禍を免れん。手を着くるの時に、先ず手を放つを凶らば、纒かに虎に騎るの危うきを脱れん。

後集 28

（意識） 一步を進めようとする時、一步を退くことを念頭においておけば、垣根に角を突っ込んだ雄羊のように進退が極まるような災難からは、ほとんど免れることができる。

また、何事かに手を着けようとする時、まずその事から手を引くことを考えておけば、それでようやく、騎虎の勢いで突っ走って降りられなくなるような危険な状態から逃れることができるであろう。

（余説） これは「抵羊触藩」と「騎虎之勢」「騎虎難下」からきています。何事かを始めることは易くても、それをうまく納めるのは難しいものです。1937年7月からの日中戦争や1945年からの太平洋戦争がそのよい例です。軍部では、始めた戦をいかにして終結させるのかという意見はほとんど無視されていたようです。国・自治体や企業における各種の事業や行事、また身边も事柄などでも同じ事が言えるのではないのでしょうか。

（参考） 周易・大壮の卦「抵羊触藩に触れて、退くこと能わず。逐くこと能わず」

（壮んであるのはよいことだが、その度を過ぎてはならない。進退が極まってしまう）

2 得るを貪る者は、金を分たるるも玉を得ざるを恨み、公に封ぜらるも侯を受けざることを怨む。権豪なるも自ら乞丐に甘んずるなり。足るを知る者は、藜羹も膏粱より旨しとし、布袍も狐貉より煖かなりとす。編民なるも王侯に譲らざるなり。

後集 29

（意識） もっと得たいと欲張る者は、黄金をもらっても玉ではなかったと怨み、貴族である公爵の位を与えられても、領地を持つ諸侯にしてくれなかったと怨む。このような者は大きな権力や財力を持っていながら、自ら乞食根性を丸出しにしている。

身の程を知って満足する者は、あかざの吸い物のような粗食でも上質の肉や穀物などの美食よりも美味しいと思ひ、粗末な布製の綿入れであってもギンギツネの毛皮よりも暖かいと感じる。その心は、一介の庶民であっても王侯貴族にも劣らないものである。

（余説） 人の欲望には限りがありません。「もっと、もっと」の欲望の中でも、権勢欲はなかなか複雑でやっかいなようです。財でも名誉でも寿命でも、一応の域に達した後は、己の分際を知ることにより心がけ、後は天にお任せするという姿勢を持ちたいものです。

また今こそ、企業の商魂に踊らされて心をいつも貧乏状態にしていることなく、「大量生産・大量消費・短サイクル・大量廃棄」について見直して、この限りあるかけがえのない地球を大切にしていけるべき時ではないかと痛切に思います。

（参考） 莊子・内篇・逍遥遊「鷦鷯、森林に巢くえども、一枝に過ぎず。偃鼠、河に飲めども、満腹に過ぎず」

（鷦鷯：ミソサザイ 偃鼠：ドブネズミ）

論語子罕「敝れたる縵袍を衣、狐貉を衣たる者と立ちて恥ざる者は其れ由なるか」

（破れた綿入れを着ていても、革衣を着た貴人と並んで平然として恥じたりしない者は由君ぐらいではないか） 由：子路（孔子十哲の1人）

3 寂を嗜む者は、白雲幽石を觀て玄に通ずとし、榮に趨る者は、清歌を見て倦むを忘る。唯、自得の士のみ、喧寂無く、榮枯無く、往くとして自適の天に非ざるは無し。後集 31

(意識) 世俗を離れて静寂を好む人は、山中の流れる雲やものさびた石だけが玄妙な道に通じるものであると固執する。また、世俗の榮華を追い求める人は、妙なる調べやあでやかな舞いを見ながら飽きることを忘れる。

ただ、真理に目覚めて悟りの道に達した人だけは、騒がしかろうが静かだろうが、世の榮枯盛衰にも関わりなく、身を置くところのすべてが自由自在で理想の天地となる。

(余説) 何ものにもとらわれない、悠々自適の境地こそが理想の天地であると教えます。もっとも相田みつおのことは「一生燃焼・一生感動・一生不悟」のとおり、悟りに達することは難しいですが、物事に執着せずに清濁併せ呑むことはできそうです。

「玄」については、老子「現象の奥底にひそむ微妙な根源世界」の意味で、無名や道と共に老子の根本思想を表すことばです。

(参考) 呂新吾・呻吟語「悟とは吾が心なり。よく吾が心を見れば、すなわちこれ真の悟なり」(卷之二・内篇・問学)

吉田兼好・徒然草「賢げなる人も、人の上のみはかりて、おのれをば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふ理あるべからず。されば、おのれを知るを、物知れる人といふべし」(第 134 段) (物：道理・真理)

4 悠長の趣は、醜醜より得ずして、菽を啜り水を飲むに得。惆悵の懷は、枯寂より生ぜずして、竹を品し糸を調ぶるに生ず。固に知る、濃処の味は常に短く、淡中の趣は独り真なりということ。後集 33

(意識) ゆったりとした風雅な気分は、濃い味的美酒を飲んでいるような豊かな生活からは得られず、豆の粥をすすり水を飲むような貧しい生活から得られるものである。

しみじみとしたもののあわれを感じられる心は、人間味を失った枯れ木のような静寂の生活中からは生じない。それは、笛を吹き琴を弾ずるような素朴な生活の中から生まれるものである。これで明らかなように、濃厚な味わいや生活は長続きするものではなく、素朴で淡白な生活こそが、微妙な真実を認識できるということが分かる。

(余説) 人生における真実の味わいは、いかにしたら得られるのかです。薩摩には「島津日新公が、天吹、琵琶、柴笛を奨励した」と伝えられ、藩政時代は郷中教育の一環として武士の間で伝承され、明治になっても荒田などの学舎で奏していたそうです。

天吹とは、コサン竹(布袋竹)で自作する 30 釵ほどの縦笛で、まさに素朴で淡白な音色が特徴です。このような古来から伝わるような、淡白な趣の真実の味わいを大切にして守り伝えたいものです。今「天吹同好会」が結成され、平成 2 年 3 月には県指定無形文化財の保持団体として認定されました。

(参考) 菜根譚・後集 24「濃艶の滋味は短し。清淡なること一分ならば、自ずから一分を悠長にす」(ほんの少しでもあれば)

荀子・天論篇「君子、菽を啜り水を飲むは、愚に非ざるなり。是れ節の然るなり」(王と君子の開きは、偶然のめぐり合わせのせいである)